

セイントとチョプラの 内科診療ガイド 第3版

監修：徳田 安春

教科書(ベースにある考え方)と マニュアル(コツ)の良いとこ取り

今回の書評、徳田先生からのご依頼であるが、編集部 S さんがメールで曰く「徳田先生は『石山先生なら、すでに原著を読んでいらっしゃるはず!』とおっしゃっていました」とのこと…うん、すみません。読んでませんでした(爽やかな笑顔で)。ご期待を見事に裏切ってしまったわけだが、さも読んでいたかのごとく書かせていただく。徳田先生には、絶対内緒である。

さて、この手の内科診療に関する本は、大きく2種類に分類される。実地で素早く調べたり利用したりに重点をおいた、いわゆるガイド本/マニュアル本と、「きっちり学びなされ」とばかりにすべてを網羅した硬派な、いわゆる教科書である。当然どちらが優れているといったものでもないが、私自身は自分の領域に関するかぎり、比較的后者で頑張ろうとするタイプである(ただし、挫折することが多い)。その一方、私はその他の分野では結構マニュアル好きであり、世にあるマニュアル本から「コツ」をつかもうとすることが多い。このように、明らかに二面性をもつ私のこの偏屈さをしっかりと満たしてくれるのが本書であった。

まず全体に目を通す。監修者のおひとり、Sanjay Saint 先生には、実は私自身は一度学会でお話したことがあ

るくらいなのだが、その際の臨床推論のプレゼンは今も強烈に印象に残っている。この人の監修なら期待できる。さらに執筆者には、主に University of Michigan Medical School における各分野の、臨床の現場に立っている先生方が名を連ねている。現在米国に舞い戻り、しかも実に20年ぶりに大学組織で身を粉にしている自分自身を鑑みるに、いわゆる「象牙の塔」ではなく「日々現場で戦っている」人たちによる書籍であることが容易に想像できる。

読み進めてみると、基本的なことから最近の比較的新しいトピックまで、「私が指導するのならここを強調したい」と思うところが随所に記載されている。日米臨床の違いに苦労した経験がある私には、米国臨床のスタンダードをこのように説明してくれる書籍の出版は大変うれしい。内容自体は「一般内科臨床を習得しようとする若い研修医向け」と感じるが、「内科全般を管理する必要のあるサブスペシャリティ専門医」「米国臨床に興味ある一般内科医」の方々にも興味をもって読んでいただけるはずである。

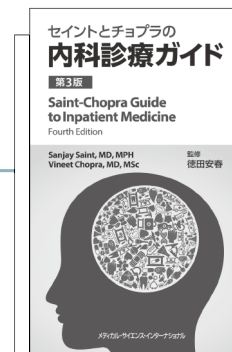
さらに、その読みやすさだ。日本の第一線で働く内科臨床医の方々が、じっくりと翻訳をされたのであろう。原

著がもつであろう読みやすさが、うまく踏襲されている(ものと想像する)。日米の違いについての訳注、これがまた私にとっては実に役に立つ。老舗の“Washington Manual”は多分に教科書的な面が強く、如何せんこれは読むのに骨が折れる。その点本書は、読みやすさにおいて圧倒的に優位に立つ。一方で「実地に重要な点に絞った内容」という面で、MGHの“Pocket Medicine”を凌駕していると私には思える。

米国内科臨床をその基盤としている本書は、同じバックグラウンドをもつ私にとって、大変有用な「指導教本」となり得る感じた。症候ごとに「実地でいかに考えるべきかのコツ」を指摘しつつ、そのベースにある考え方も教えてくれる。徳田先生は序文で秀逸な「ネモニクス」に関してもふれておられたが、その点も強調して然るべきである。

日本の臨床教育を日々実践する立場にある先生方にも、私が満足した点にご同意いただけるのではなかろうか。是非一読をお勧めしたい。

(石山 貴章)



MEDSi
5,720円(本体5,200円+税10%)
A5変/708頁
ISBN978-4-8157-0300-4